

細田遺跡

—細田採石工事に伴う事前調査—

平成14年12月

宮城県河南町教育委員会
丸興産業株式会社

細田遺跡

—細田採石工事に伴う事前調査—

発刊の辞

この度、平成13年度に発掘調査を実施した「細田遺跡」について、その成果をまとめた調査報告書を刊行いたします。

この調査は、細田遺跡に所在する丸興産業株式会社の採石工事に伴うもので、遺跡が須江丘陵に位置することから、須江窯跡群との関連も指摘されていました。

細田遺跡は、平成3年12月に石巻文化センターの中村光一氏（当時）より細田山共同葬祭場北側の沢で土器を発見した旨の連絡を受け、河南町教育委員会が現地を確認し、遺跡として所管の宮城県教育委員会に届け出たものです。

今回の調査では、9世紀後半ごろと推定されるロクロピットを伴う住居跡（工房跡）が検出されたことが注目されます。精製された白色粘土塊や、作業台として使用したと考えられる加工石、そして小型の土師器甕（作業で手を濡らすために水を入れたもの？）がロクロピットと一緒に出土しており、土器製作工房として数少ない資料が得られました。

また、河南町に隣接する矢本町で発掘調査が行われている赤井遺跡は、牡鹿郡衙か、牡鹿柵の最も有力な推定地といわれています。この遺跡に須恵器や土師器を供給していたのが、須江丘陵だと考えられています。

今年の8月4日に『矢本町文化講演会』が開催され、赤井遺跡について、東北学院大学の熊谷公男先生の興味ある貴重なご講話を聞くことができました。

724年（神亀元年）の多賀城創建の頃、古代牡鹿郡が成立したといわれており、牡鹿郡衙のあったとされる矢本町と須江窯跡群の所在するわが河南町は、古代より密接な関係があったのだと考え、あらためて古のロマンに浸ることができました。

さて、今回の調査結果が須江窯跡群や赤井遺跡、また関連する遺跡等の研究解明に少しでも参考になれば幸いに思います。

最後に、発掘調査にご指導ご協力をいただいた方々、報告書の発行に向けて整理作業に携わっていた方々、そして多大なるご配慮をいただいた丸興産業株式会社に対して、心から感謝の意を表し、発行の辞といたします。

平成14年12月

河南町教育委員会

教育長 斎藤 龍雄

例　　言

1. 本書は、丸興産業株式会社による細田採石工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、実施された調査の報告書である。

2. 発掘調査は、次の要項で実施した。

【遺跡名】 細田遺跡(遺跡番号: 69052)

【所在地】 宮城県桃生郡河南町須江字細田 89, 90, 91 番地

【調査面積】 20,678 m² (調査面積 約 5,700 m²)

【調査期間】 平成 9 年 8 月 28 日～平成 9 年 9 月 4 日(確認調査)

平成 10 年 11 月 4 日～平成 11 年 11 月 6 日(〃)

平成 11 年 10 月 19 日～平成 11 年 10 月 22 日(〃)

平成 13 年 10 月 15 日～平成 13 年 12 月 7 日(事前調査)

【調査主体】 河南町教育委員会

【調査員】 河南町教育委員会社会教育課 主査兼社会教育主事 中野裕平(平成 14 年 3 月 31 日まで)
同 主事 市川洋一

3. 調査指導：宮城県教育庁文化財保護課

4. 発掘調査にあたり、次の方々から指導・協力をいただいた(敬称略)。

【発掘調査】 宮城県教育庁文化財保護課：真山悟、阿部博志、後藤秀一、天野順陽、高橋栄一
矢本町教育委員会：佐藤敏幸(整理作業も)

河南町糠塚行政連絡区長：及川久六

陶芸家：故遠藤卓一郎、遠藤寿哉

【整理作業】 東北歴史博物館：高野芳宏、山田晃弘

宮城県多賀城跡調査研究所：古川一明

仙台育英学園高等学校：渡邊泰伸

青森県東北町教育委員会：古屋敷則雄

〃 野辺地町歴史民俗資料館：田中寿明

〃 五所川原市教育委員会：佐藤文孝、藤原弘明

岩手県北上市埋蔵文化財センター：沼山源喜治、稻野裕介

〃 水沢市埋蔵文化財調査センター：伊藤博幸

秋田県埋蔵文化財センター：柴田陽一郎

山形県埋蔵文化財センター：長橋至

福島県文化財センター白河館：石本弘

〃 鹿島町歴史民俗資料館：佐藤友之

〃 会津若松市教育委員会：石田明夫

5. 調査・整理参加者 派遣社会教育主事 青木敏彦、伊藤とも子、加藤清子、川田久美子、佐々木智加、佐藤照大、

丹野幸子、梁取庄佳

6. 報告書作成にあたっては、次の者が作業を分担した。

【遺物火測】 中野裕平、川田久美子

【遺物トレース】 伊藤とも子、川田久美子、丹野幸子

【遺構トレース】 伊藤とも子、川田久美子、丹野幸子

7. 上層の色調表記については、「新版標準土色帖」10 版(小山・竹原: 1990.6, 日本色研事業株式会社)に準拠し、土性区分は国際土壤学会法の基準を参考にした。

8. 本書の執筆は、河南町教育委員会社会教育課主査兼社会教育主事(現 河南町総務課主査)中野裕平、

副集は社会教育主事 市川洋一及び中野が担当した。

目 次

発刊の辞	
例 言	
目 次	
I. 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	1
II. 調査経過	7
1. 調査に至る経過	7
2. 調査の方法と経過	8
III. 基本層序	10
IV. 検出された遺構と出土遺物	10
1. 積穴住居跡	10
2. 土壙	18
3. 焼土遺構	21
4. 不明遺構	21
5. その他	21
V. 考察とまとめ	22
引用・参考文献	27
写 真 図 版	29
報 告 書 抄 錄	43

I. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

細田遺跡は、宮城県桃生郡河南町須江字細田地内に所在し、JR石巻線佳景山(かけやま)駅の南方約1.5kmにある。遺跡の所在する河南町は面積69.33km²、人口約18,154人(平成14年8月31日現在)の町で、宮城県の東部に位置し、石巻市の北西、矢本町の北方に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川に合流し、町の北部及び東部を区画しながら石巻湾に注いでいる。

東に標高60～90mの通称須江丘陵、西に飽岳丘陵からつづく標高70～170mの通称旭山丘陵、北に最高所173.9mの和渕山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央部には低坦地があり、江戸時代には農業用水確保のため広沢治が造られたが、大正10年から昭和3年にかけて干拓されて水田地帯となっている。

須江丘陵は、小竹地区を挟んで大きく南北に二分される。細田遺跡は、丘陵北部のほぼ中央の頂部及びその周辺斜面に立地しており、頂部の標高は50～70mである。現況は杉や雑木の山林である。

本遺跡の地層は、砂岩、黒色粘板岩、鰐状頁岩、花崗岩質岩の礫からなる中新統：追戸層(佳景山礫岩部層)が基盤をなす。その上に礫岩、砂岩、シルト岩を主体とする鮮新統：亀岡層、その上に砂岩とシルト岩の互層と細粒凝灰岩、礫岩を主体とし、中程に僅かに褐灰～灰黄褐色の粘土質シルト岩を挟む鮮新統：表沢層がある。さらにその上には層の下部が粘土岩を挟んだ砂質シルト岩と砂岩の互層を主体として、層の上部では淡灰～灰色の陸成的な粘土質シルト岩が発達している鮮新統：俵庭層(仙台層群では大年寺層に対比させられる)、その上に部分的に厚さ1m前後の発達した斜層理などの段丘堆積物が見受けられる(淹沢・神戸ほか：1984.3)。

2. 遺跡の歴史的環境

町内には、細田遺跡の所在する須江丘陵やその西に位置する旭山丘陵などの丘陵部を中心に、多数の遺跡が分布している。これらの遺跡について、時代別にふれてみたい。

縄文時代の遺跡は24箇所確認されている。この中で、型式名のわかる土器を出土しているのは12遺跡である。時期の古い遺跡から追っていくと、以下のようになる。

桑柄貝塚は、カキを主体とした鹹水産貝塚であり、前期(上川名II式、大木1式)の遺物を包含する。

闘ノ入遺跡では、前期(大木2式)、中期(大木7a～8b式)、後期の遺物が出土している(中野：1988.3、中野・佐藤：1990.3、佐藤1993.3)。

朝日貝塚は、ヤマトシジミを主体とした汽水産貝塚であり、中期(大木7b、8a、8b式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか：1989.3)。

小崎遺跡からは、中期(大木8、9式)、後期、晚期の遺物が採集されている。

須江糠塚遺跡からは、中期(大木9式)の遺物が出土している(高橋・阿部：1987.3)。

宝ヶ峯遺跡は、縄文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学史的に有名である(伊東信雄：

1957.3. 松本彦七郎：1919.5, 1919.9. 志間・桑月 1991.11)。中期、後期(南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式)、晩期(大洞B、B C、C 1式)の土器、土偶、スタンプ状土製品、石器、石製品、骨角器など多数の遺物が出上している。また、遺跡の一部には、オオタニシなどからなる淡水産の貝塚がある。

前山D遺跡からは、中期(大木8式)、後期(南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式)、晩期(大洞C 1式)の上器、土偶、土製品、石器、石製品が出土している。特に、使用痕跡のない石器、石器製作時に派生するチップの出土が顕著で、ツールが少ない点も特徴である。また、多数のたたき石、未完成の石錘などもある。宝ヶ峯遺跡の南東約250mに位置し、年代的にも重複することから、同遺跡との関連が考えられる遺跡である。

代官山遺跡からは、後期(南境式)の遺物が出土している(佐藤：1993.3)。細田遺跡、俵庭遺跡、大沢A遺跡からも後期(南境式)の遺物が採集されている。

前山C遺跡、太田沢遺跡からは、後期(南境式)、晩期(大洞C式)の遺物が出土している。両遺跡とも宝ヶ峯遺跡に近接しており、その関連が考えられる遺跡である。

外に前山A遺跡・B遺跡、箱清水寺脇遺跡等があり、その多くは、旭山丘陵の麓部で平坦地に接する縁辺や沢をやや入ったところに広がる平坦部や緩斜面に立地する。また、宝ヶ峯遺跡を囲むように、放射状に位置している。しかし、その性格は、貝塚や発掘調査の実施された少数の遺跡を除いては不明である。

弥生時代の遺跡は2箇所確認されている。本鹿又遺跡では、旧北上川の川床から中期(大泉式)の遺物が採集されている。俵庭遺跡からは、土器は採集されていないが、アメリカ式石錘が採集されている。

古墳時代の遺跡は8箇所確認されている。須江糠塚遺跡では、前期(塙釜式期第II B段階)の竪穴住居跡が7軒検出されている。いずれも方形を基調としており、丘陵尾根上の平坦面に立地している(高橋・阿部：前掲)。

関ノ入遺跡からも、前期(塙釜式期第II B～第III段階)の竪穴住居跡が2軒検出されている。いずれも1辺が約3m前後の方形を基調とした小型住居で、丘陵尾根上の平坦面に立地している(佐藤：前掲、ほか)。

前山A遺跡からも、前期(塙釜式期第II B～第III段階)の竪穴住居跡が1軒検出されている。1辺が約6.5m前後の方形を基調とした大型住居で、丘陵尾根上の平坦面に立地している。

新田A遺跡でも前期(塙釜式期第II B段階)の土器が採集されている。豈の災遺跡からは、前期(塙釜式終末段階)から中期(南小泉式)にかけての土器が採集されている。後期の遺跡としては、代官山横穴墓群がある。外に、時期は不明であるが、高森山遺跡、群田遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡は28箇所確認されている。その大部分は丘陵上にある。細田遺跡では、9世紀代の竪穴住居跡などが検出された。この中に、ロクロビット・精製粘土・作業台と推定される石を伴うものがあり、工房跡と推定される。また、別地点の道路法面と、平成10・11年度の確認調査によって採石工事現場内(現状保存箇所)の斜面に9世紀代の窯跡とそれに伴うと推定される須恵器が発見された。また、平成13年度の調査区の西側斜面からは、9世紀代の須恵器・土師器、窯体の一部が採集されている。

須江丘陵では、丘陵の全域に窯跡が分布している。昭和61年度に調査した須江糠塚遺跡では、奈良時代後半から平安時代初期にかけての住居跡9軒、9世紀後半から10世紀前半にかけての窯跡6基を検出した(高橋・阿部：前掲)。

昭和62年度から平成6年度にかけて継続的に発掘調査が行われた関ノ入遺跡では、奈良時代と平安時代

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	須江鹽塚遺跡 (糠塚館跡)	集落跡 窯跡、城館	縄文(中)、古墳(前)、奈良、平安、中世	26	黒沢 A 遺跡	包含地	縄文、古代
2	須江瓦山窯跡	窯跡	奈良、平安	27	黒沢 B 遺跡	包含地	縄文、古代
3	池袋開遺跡	包含地	古代	28	箱清水 A 遺跡	包含地	縄文(後)、古代
4	広瀬沼遺跡	包含地		29	箱清水 B 遺跡	包含地	縄文、古代
5	宝ヶ峯遺跡	包含地 貝塚	縄文(中～晩)、奈良、平安	30	箱清水寺脇遺跡	包含地	縄文
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	31	小友遺跡	包含地	古代
7	本鹿廻遺跡	包含地	弥生	32	高森山遺跡	包含地	古墳、古代
8	桑柄貝塚	貝塚	縄文(前)	33	大沢 A 遺跡	包含地	縄文(後)、古代
9	塙野田城跡 (塙煮田城跡)	城館	中世	34	大沢 B 遺跡	包含地	縄文
10	宿屋敷跡	城館	中世	35	大沢 C 遺跡	包含地	縄文、古代
11	要害館跡 (館山館跡)	城館	中世	36	夷田館跡	城館	近世
12	武田館跡 (武田屋敷跡)	城館	中世、近世	37	代官山遺跡	集落跡 窯跡	縄文(後)、奈良、平安
13	柏木館跡	城館		38	桑柄遺跡	包含地	古代
14	小崎館跡	城館	近世	39	新田 A 遺跡	包含地	古墳(前)、古代
15	草田館跡 (草田遺跡)	城館 包含地	縄文、中世	40	新田 B 遺跡	包含地	古代
16	喜多村館跡 (高地谷館跡)	城館	中世	41	代官山横穴墓群	横穴墓	古墳、古代
17	青木館跡 (林光館跡)	城館	中世	42	群田遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良、平安、江戸
18	新城館跡 (駒立館跡)	城館	中世	43	奈良山遺跡	窯跡	古代、江戸
19	駒場館跡	城館	中世	44	御塙藏場跡	藏跡	近世
20	俵庭遺跡	包含地	縄文(中・後)、弥生、古代	45	細田遺跡	窯跡 集落跡	縄文、奈良、平安
21	長者館跡 (長者半遺跡)	城館 包含地	縄文、古代、中世	46	鶯の巣遺跡	包含地	古墳
22	関ノ入遺跡	集落跡 窯跡	陶石器、縄文(前～後)、古墳、奈良、平安、中世	47	前山 B 遺跡	包含地	縄文、古代
23	小崎遺跡	包含地	縄文(中～晩)、奈良、平安中世	48	前山 C 遺跡	集落跡	縄文(後・晩)、奈良、平安
24	太田沢遺跡	集落跡	縄文(晩)、古代	49	前山 D 遺跡	集落跡	縄文(中～晩)、奈良、平安
25	前山 A 遺跡	集落跡	縄文、古墳(前)、奈良、平安				

第1表 遺跡地名表



本書に記載の地図は、国土交通省 地理情報局の承認を得て、国土地理院1/50,000
地図情報を複数したものであります。

前半の竪穴住居跡 49 軒（国分寺下層式期 17 軒、表杉ノ入式期 23 軒、不明 9 軒）、9世紀初頭から 10 世紀前半にかけての窯跡 23 基、9世紀代を主体とする粘土採掘坑跡 48 基、水簾坑と推定される土壙 8 基、10 世紀半ば以降と推定される製鉄遺構 3 基などが検出されている（中野・佐藤：前掲、佐藤：前掲）。粘土採掘坑跡の多くは、前記俵庭層や表沢層の上に設けられていた。

須江瓦山窯跡には、奈良・平安時代の瓦や須恵器を生産した窯跡群がある。瓦の一部は、牡鹿郡衙あるいは牡鹿柵跡と推定される矢本町赤井遺跡に供給されている（三宅・進藤・茂木：1987.3）。平成 3 年度の発掘調査では土壙 29 基、焼土遺構 1 基が検出されている。土壙の中には、粘土採掘坑跡と推定されるもの 11 基、須恵器甕を横位に埋設したもの 1 基があった。

代官山遺跡では、8世紀後半と9世紀後半の窯跡が各 1 基ずつと、8世紀末から 9 世紀初頭にかけての竪穴住居跡 1 軒が検出されている（佐藤：前掲）。

長者館跡（長者平遺跡）では、一辺 60 m 前後の方形区画を土壙状の遺構と溝状の遺構がめぐっている。溝状遺構は逆台形の断面形を呈し、上端幅約 5 ~ 6 m、下端幅約 1 m、最大深約 1.8 m の大規模な区画溝で、堆積土からは 10 世紀前半に降下した十和田 a 火山灰を検出した。近接した代官山遺跡より「佛」とヘラ書きされた土師器坏、閑ノ入遺跡からは仏具を模倣したと考えられる土師器多口瓶・須恵器鉢が出土していることから、古代寺院と関連した遺構の存在が想定される（佐藤：前掲）。

旭山丘陵側に移ると群田遺跡では、8世紀末から 9 世紀前半にかけての竪穴住居跡 1 軒とそれにつづく 9 世紀代の竪穴住居跡 2 軒、竪穴遺構 7 基、骨片の入った須恵器甕を立位に埋設した土壙 1 基などが検出されている（中野：1993.3）。また、太田沢遺跡、前山 C 遺跡、前山 D 遺跡から表杉ノ入式の土師器が出土している。太田沢遺跡からは 9 世紀前半ころの竪穴住居跡 1 軒が検出されている。外に小崎遺跡、大沢 C 遺跡、俵庭遺跡などがある。

中世以降になると、旭山や須江の丘陵上など 14 箇所に城館が築造されている。長者館跡（長者平遺跡）は、金堀吉次の仮屋敷跡（藩政期には小島嘉右エ門の除屋敷跡とも言われる）の伝承がある。糠塚城跡（須江糠塚遺跡）は、古代の中山柵跡にも擬定されたこともあり（清水東四郎：1924.12、鈴木省三：1924.12）、「仙台領内古城書上」によれば、東西 20 間、南北 16 間の規模で、館主は須藤勘解由左衛門と記されている（仙台叢書：1971）。小規模な平山城の形態で、空堀が一部残存している。塩野田城跡は東西 21 間、南北 27 間の規模で、城主は須藤勘解由左衛門（一説には矢代斎三郎）と伝えられている（「安永風土記」）。小規模な平山城の形態で、空堀や土壙状遺構が一部残存している。夷田館跡は、葛西氏家臣夷田氏の居館と伝えられている（「風土記御用書上」）。多くの城館跡は、年代、館主とともに不明である。

また、葛西氏の支配領域と推定される鹿又地区、須江地区を中心として、町内には、現在 111 基（鹿又 59 基、須江 39 基、北村 9 基、和潤 3 基、広潤 1 基）の板碑が確認されている。紀年名の判読できるものの中でも最古は弘安元年（1278）、最新は文明 10 年（1478）のものである（佐藤雄一：1986.11）。残念ながら、多くの板碑は原位置を保っていない。これらの中には、ある特徴的な板碑もある。閑ノ入遺跡出土の板碑は、木炭窯の焚口等を強化するために、板碑を折って燃焼部の側壁などに貼り付けたような状況で出土した（中野：1994.6）。また、北村字高寺にある高福寺からは 5 基の板碑が発見されたが、いずれも江戸時代元禄期前後の墓碑に転用されている。その中には、五輪塔に刻まれる「キャ・カ・ラ・バ・ア」を左右対称に刻んで五

輪塔を模した「五輪塔板碑」と呼ばれるものもある。発見地点の西側背後に小規模な平山城の形態を呈した新城館跡があること、板碑の中には「鎌倉権五郎五代」の文字が見受けられること、江戸時代以前に新城館跡から群田遺跡の両脇を通過して小野(鳴瀬町)に通じる道があったとされることから、深谷莊の領主である長江氏に関連した中世的世界が想定される。以上、町内に現存する板碑は、ほぼ全て粘板岩製である。

江戸時代以降、新田開発、旧北上川や江合川の改修工事が行われ、舟運が盛んになる。平成2年度と10・11年度に調査された御塙蔵場跡では、基壇状遺構(上面:約400 m²)が検出されている(佐藤:1991.3, 中野:2000.11)。御塙蔵場は、桃生・牡鹿・本吉・気仙の四郡から運送された塙を納庫したとされる施設である(「風土記御用書上」)。群田遺跡からは、主に18・19世紀代の生活用品などが出土して井戸跡や建物を区画するような溝があることから屋敷跡と考えられる整地面1箇所、墓壙1基が検出されている(中野:前掲)。外に、東浜街道や涌谷街道、そしてこれらの街道に伴う一里塙跡、瓦や陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡、須江瓦山窯跡、仙台藩の財政建て直しの一環として寛文年間に完成した深谷地方の新田開発に係る用水確保のための広瀬沼(大溜池・大堤)、そこに水を引くための縦入堀、松ヶ崖、長岩堰、新縦入堀の潜穴跡、広瀬沼から鹿又村へ農業用水を引くための糠塙潜穴跡などがある。

II. 調査経過

1. 調査に至る経過

細田遺跡の所在する宮城県桃生郡河南町須江は、石巻市に隣接することからスプロール化が進み、これまでに大小多くの開発が行われてきた場所である。それは、河南町による工業団地用地造成工事、河南町閑ノ入土地区画整理組合による住宅団地用地造成工事、齋藤建設株式会社による土砂採取工事、各電信会社による無線中継所設置工事、個人住宅の建設、石巻地方広域水道企業団による須江山浄水場建設工事、そして丸興産業株式会社(以下「丸興産業」)による細田採石工事などである。

細田採石工事は、丸興産業による宮城県桃生郡河南町須江字細田89・90・91番地内における採石事業である。丸興産業は、昭和47年7月から鹿又字欠山地内で採石事業を行ってきた。平成3年12月、河南町教育委員会(以下「教育委員会」)は、石巻文化センター中村光一氏(当時)より須江字細田の共同葬祭場北側の沢で土器を発見した旨の連絡を受け、直ちに現地を確認した。遺跡であることを確認した教育委員会は、隣接地で採石工事を行っていた丸興産業に今後採石工事を計画している地域の一部に遺跡があることを通知した。

平成7年10月、採石法第33条の採取計画に係わる協議の中で、3年目以降の採取予定区域の一部が細田遺跡にかかるため、教育委員会は、丸興産業にこの旨を通知した。

平成8年9月、採石工事区域が遺跡に接近したため、教育委員会と丸興産業は現地立会の上、遺跡と考えられる範囲を確認した。その上で、遺跡部分については協議文書の提出を求めた。

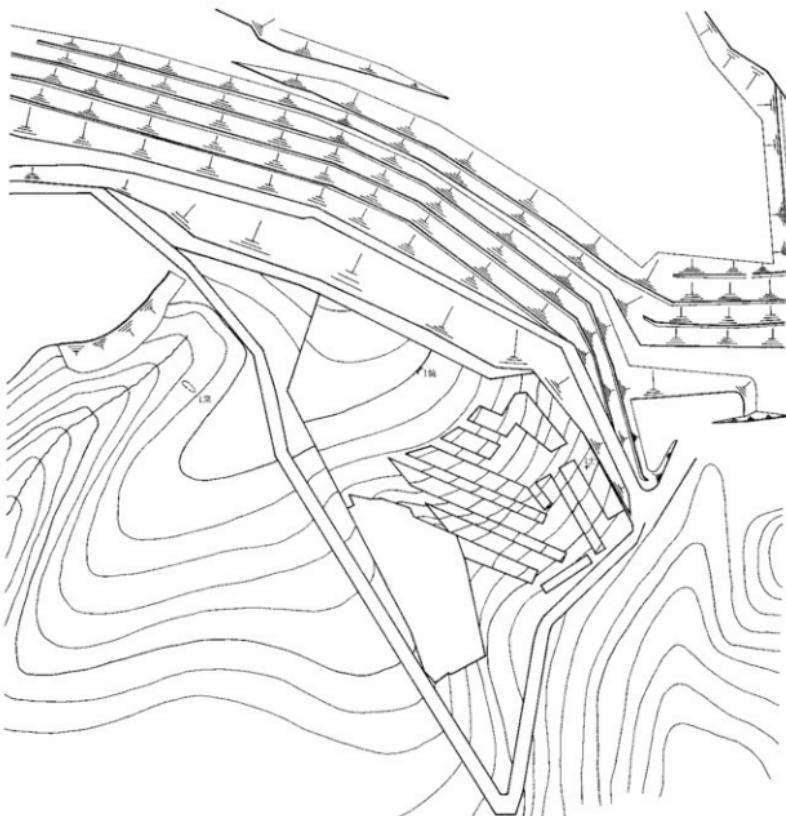
平成9年2月、丸興産業は教育委員会に協議文書を提出し、同9年3月、県文化財保護課を加えた三者で取扱いの協議に入った。

2. 調査の方法と経過

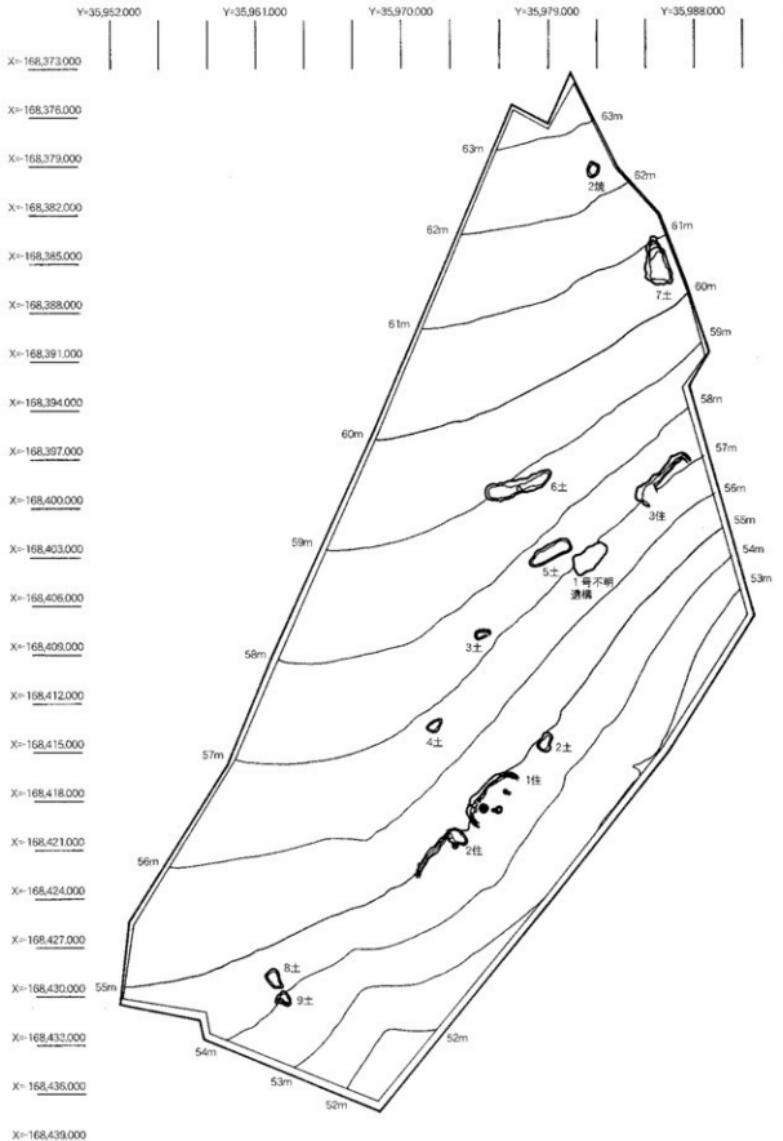
今回の発掘調査は、丸興産業による採石工事予定地の一部が『宮城県遺跡地図』(宮城県教育委員会:1993.3)登載の周知の埋蔵文化財包蔵地である細田遺跡の範囲内に所在するため、遺跡の立地する丘陵斜面を対象として実施したものである。

確認調査は、平成9年8月28日～同年9月4日、平成10年11月4日～同年11月6日、平成11年10月19日～同年10月22日の3回実施し、丘陵の地形に則って3～6m幅のトレンチを2～6mの間隔をもって設定し、あるいは遺構集中地点は全面的に、重機によって表土除去を行い、遺構を確認した。

これによって、調査区内の遺構の分布が把握され、遺構集中箇所と点在箇所が確認された。また、グリ



第2図 細田遺跡調査区



第3図 平成13年度調査区遺構配置図

ットの設定、表記については、国家座標のX軸、Y軸に基づいて原点を設置して表記した。

また、遺構のない部分については、確認調査後に丸興産業に引き渡した。

事前調査は、遺構集中箇所を中心に、ほぼ全面について行った。効率的に調査を進めるため、重機を用いて表土を除去し、人力による精査の上、遺構を確認した。その結果、竪穴住居跡3軒、土壙9基、焼土遺構2基、不明遺構1基を検出した。(土壙・焼土遺構各1基ずつについては平成10年度確認調査時に検出)。

検出した遺構の実測図は、全て1/20図で作成した。

発掘調査は、平成13年10月15日に開始し、同年12月7日までに遺構の平面図・断面図、写真、調査区の全景写真及び文章記録等の記録化を全て完了し、調査を終了した。

III. 基本層序

今回の調査区は、丘陵斜面からなる。斜面は、上部に多少の緩斜面があるものの、外はほぼ同一の傾斜を呈する。

[I層] にぶい黄褐(10 YR 4/3 ~ 10 YR 5/4)色のシルトである。本遺跡の表土で、調査区全域に分布する。粘性はなく、しまりに欠ける。層厚は、10 ~ 30 cmである。現況は杉や雑木の山林である。少量の土師器・須恵器を含む。

[II層] 暗褐(10 YR 3/3 ~ 10 YR 3/4)色、または黒褐(10 YR 2/2 ~ 10 YR 2/3)色のシルトである。調査区南側の標高約60m以下に分布する。やや粘性があり、しまりに欠ける。層厚は5 ~ 60 cmである。

[III層] 褐(10 YR 4/4)色のシルトである。調査区全域に分布する。やや粘性があり、しまりに欠ける。層厚は、10 ~ 25 cmである。少量の土師器、須恵器、縄文土器を含む。

[IV層] 黄褐(10 YR 5/6)色の粘土質シルトである。本調査区の地山で、調査区全域に分布する。今回検出された全ての遺構は、本層上面で確認されている。

IV. 検出された遺構

今回の調査では、竪穴住居跡3軒、土壙9基、焼土遺構2基、不明遺構1基が検出された。これらの遺構に伴って、土師器・須恵器等の遺物が出土した。

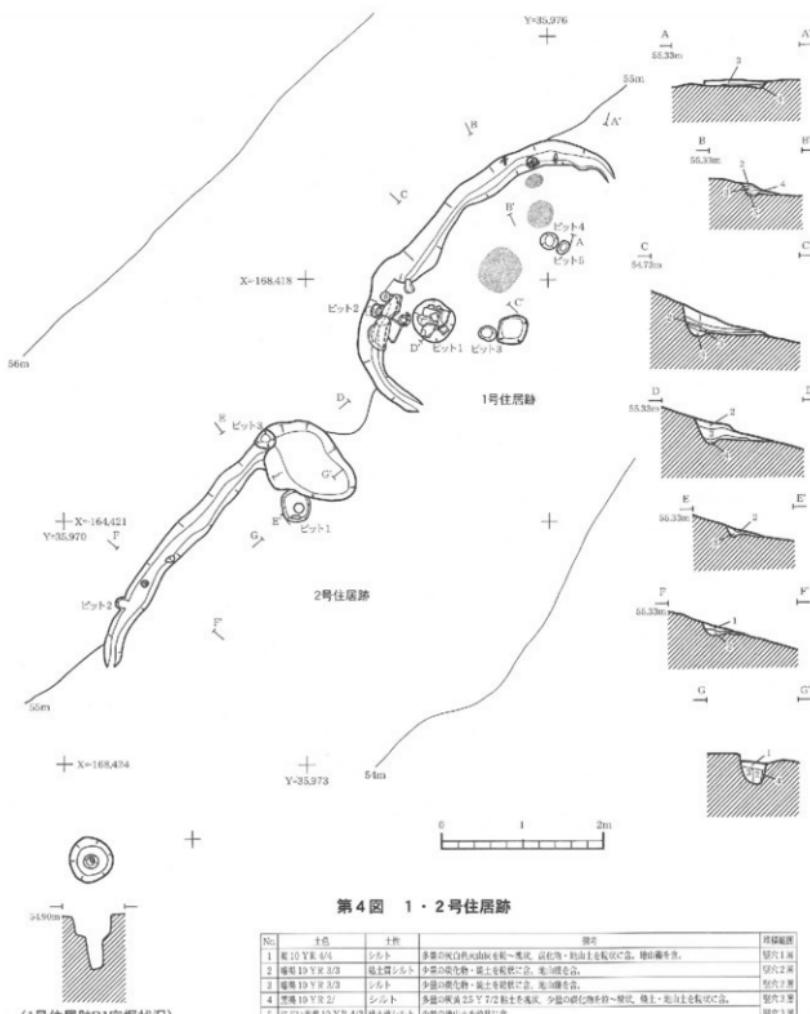
1. 住居跡

(1) 1号住居跡

[確認面] 基本層序IV層から確認された。

[重複・増改築] 認められない。

[規模・平面形] 北西壁の全部と北東壁・南西壁の一部が検出された。残存する各壁の幅は、北西壁3.57m、北東壁0.93m、南西壁0.97mである。一辺が3.5m前後の正方形または長方形と推定される。



第4図 1・2号住居跡

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	褐10 YR 4/4	シルト	多量の灰白色火山灰～塊灰、炭化骨・火山土を軽灰に含。火山礫を含。	壁片1箇
2	褐色19 YR 3/3	火山質シルト	少量の炭化物・火山土を軽灰に含。火山礫を含。	壁片2箇
3	褐色19 YR 3/3	シルト	少量の炭化物・火山土を軽灰に含。火山礫を含。	壁片2箇
4	褐色19 YR 2/2	シルト	多量の灰質25 Yの火山土を塊灰、少量の炭化物を含。塊灰・火山土を軽灰に含。	壁片3箇
5	C灰19 YR 4/3	火山質シルト	少量の火山土。	壁片1箇

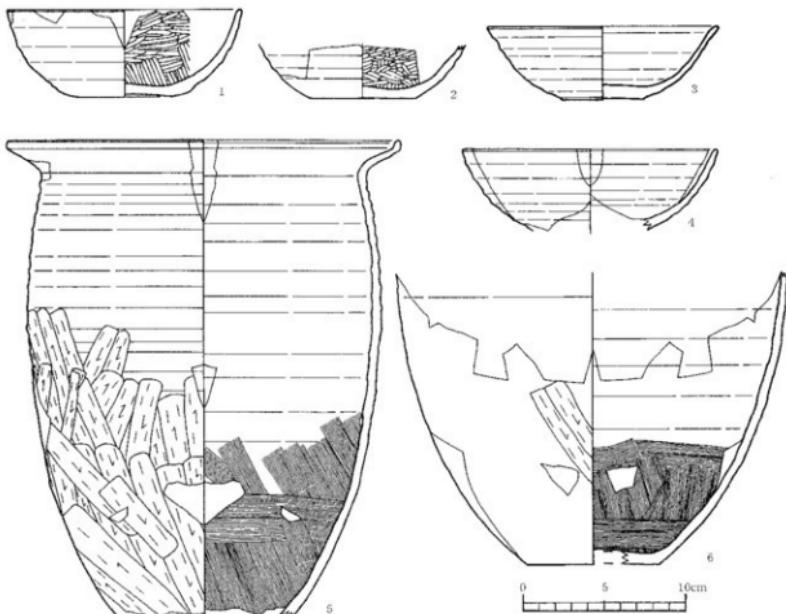
第2表 1号住居跡土層註記表

No.	土色	土性	備考
1	灰10 YR 5/1	シルト	少量の炭化物・火山土を軽灰に含。
2	褐色10 YR 3/3	シルト	少量の炭化物を軽灰。火山土を軽・塊灰に含。
3	褐色10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物を軽灰に含。
4	褐色13 YR 3/3	火山質シルト	少量の炭化物・火山土を塊灰～灰灰に含。前作物の茎は上記3層より多い。
5	褐色0 YR 4/4	シルト	少量の炭化物を軽～塊灰に含。

第3表 1号住居跡P1(ロクロビット)土層註記表

No.	土色	土性	備考
1	灰白10 YR 5/2	粘土	繊維粘土
2	褐色19 YR 4/4	シルト	少量の炭化物を軽～塊灰。火山土を軽灰に含。

第4表 1号住居跡P2土層註記表



第5図 1号住居跡出土遺物（1）

No.	性別	形態	外面	内部	口径・底径・深さ(cm)	層号
1	上階部灰	灰面	ロクロナデ	凹面、底切り	へらえ付き、黒色質地 14.5・8.5・5.4	Ⅳ層 7-2
2	下階部灰	灰面	ロクロナデ	凹面、底切り	へく玉付き、素面質地 —・6.4・—	Ⅳ層 7-1
3	床面	焼跡（一層目）	ロクロナデ	凹面、底切り	ロクロナデ 14.3・4.5・5.1	Ⅳ層 7-1
4	底面	焼跡面	ロクロナデ	—	ロクロナデ 15.6・—・—	Ⅳ層 7-1
5	上階部灰	武曲P（ロクロビット）	ロクロナデ、へら底	—	ロクロナデ、ナデ 24.0・—・—	Ⅳ層 7-2
6	下階部灰	焼跡土字・武曲P（ロクロビット）	ロクロナデ、へら底、マヌカ	側面	ロクロナデ、ナデ —・8.0・—	Ⅳ層 7-3

第5表 1号住居跡出土遺物観察表(1)

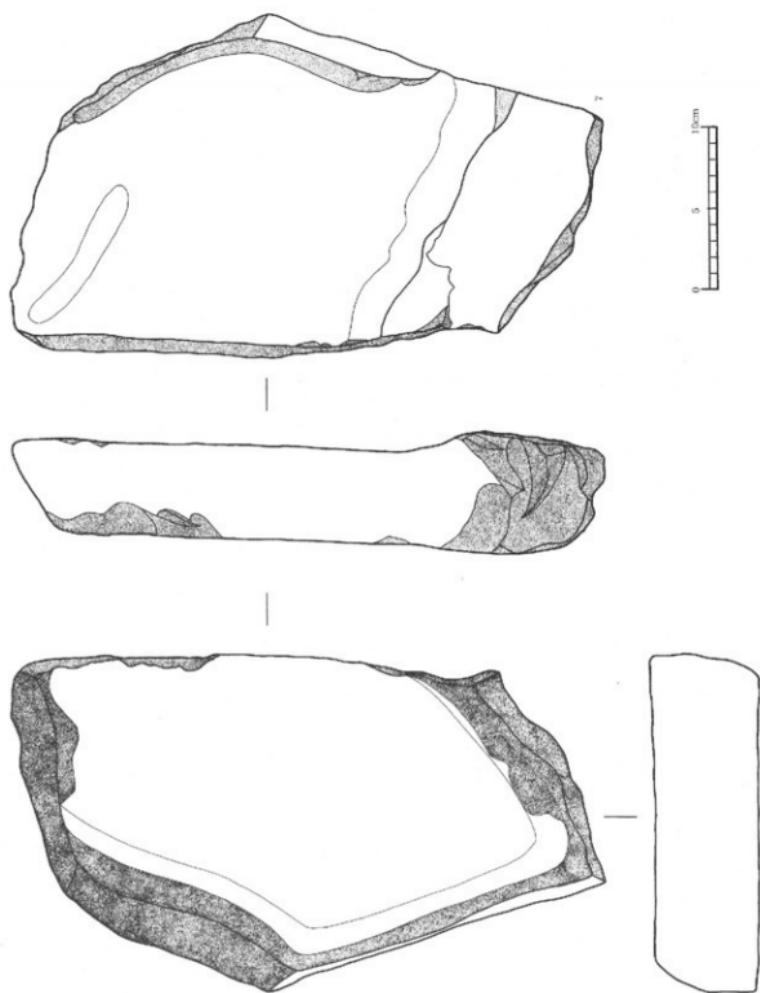
〔豎穴層位〕豎穴層位は3層に大別され、いずれも自然堆積層である。この中で、層No.1は灰白色火山灰を含む。

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなり、最も保存の良い北西壁では35cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

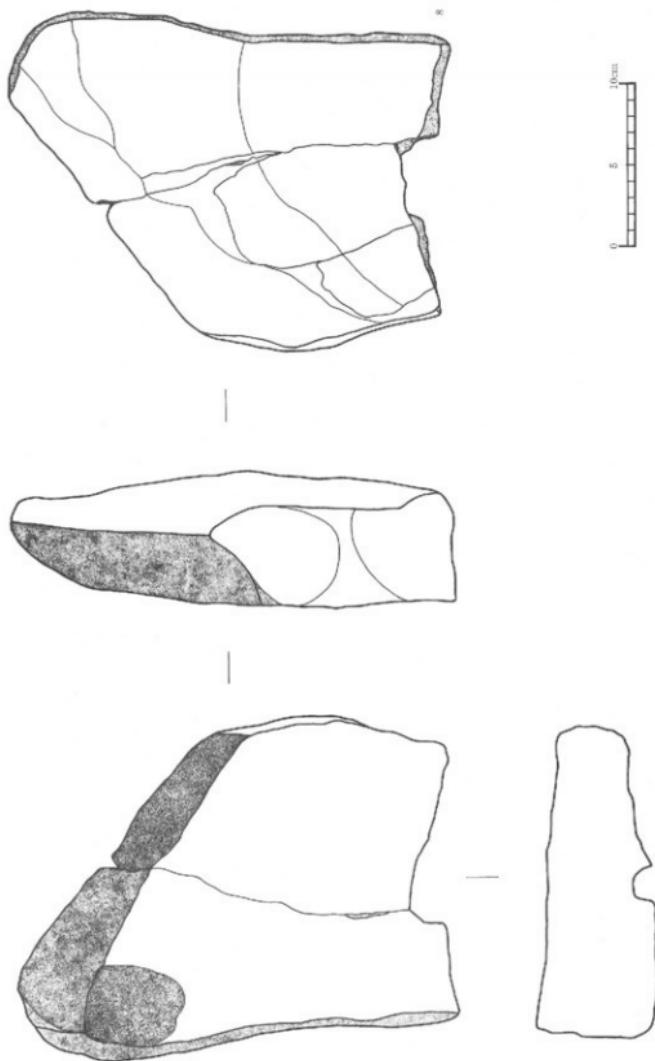
〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは北東側が最も高く、南側になるにつれて徐々に低くなる。全体的にややかたい。床面南半を中心にして強い火熱の痕跡が認められた。比較的急な斜面に立地しており、南半部が自然の削平を受けていた。

〔柱穴〕5個のビットが検出された。ビット3・5は柱穴と考えられる。ビット2は壁柱穴と考えられる。ビット4は柱穴ではない。他に北西壁の北側に棒状の炭化物が確認され、壁柱穴と推定される。ビット1はロクロビットである。

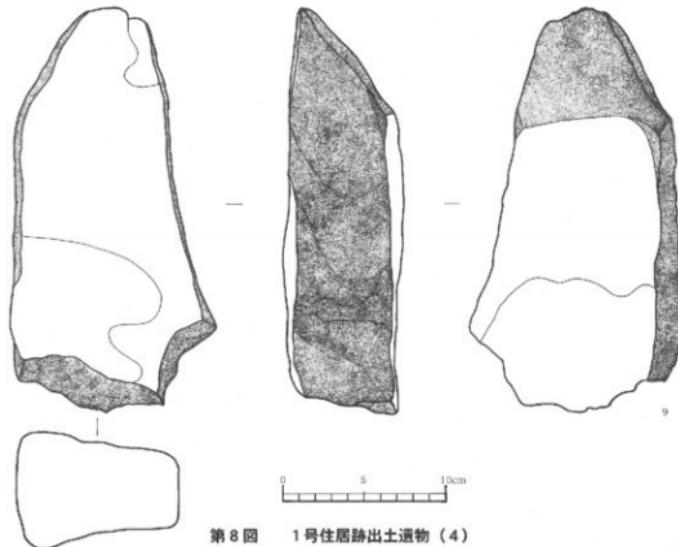
〔カマド〕検出されなかった。



第6図 1号住居跡出土遺物（2）



第7図 1号住居跡出土遺物（3）



第8図 1号住居跡出土遺物(4)

No.	種別	基位	残存長・幅・厚cm	備考
7	骨石	床面	36.5・20.7・5.7	測定7-5
8	骨石?	コクロヒット堆積層?	27.3・19.1・8.0	
9	骨石?	コクロヒット堆積層?	25.0・18.8・7.1	

第6表 1号住居跡出土遺物観察表(1)

[貯藏穴状ピット]検出されなかった。

[周溝]壁と同様に全部は検出されなかつたが、壁沿いに存在したものと推定される。幅14~30cm、深さ3~7cm、断面は「U」形である。底面レベルは北隅が最も高く、南東側に向かうにつれて徐々に低くなる。

[出土遺物]床面、周溝、コクロヒットを中心として、土器の一括資料が出土した。

(2) 2号住居跡

[確認面]基本層序IV層から確認された。

[重複・増改築]柱穴の一部が擾乱穴によって切られていた。

[規模・平面形]北西壁と北東壁の一部が検出された。残存する各壁の幅は、北西壁3.78m、北東壁1.08mである。一边が3m前後の正方形または長方形と推定される。

[竪穴層位]竪穴層位は2層に大別され、いずれも自然堆積層である。この中で、層No.1は灰白色火山灰を含む。

[壁]基本層序IV層からなり、最も保存の良い北西壁では21cmの高さで残存している。

[床面]基本層序IV層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは北側が高く、南東側になるにつれて徐々に低くなる。全体的にややかたい。比較的急な斜面に立地しており、南東側が自然の削平を受けていた。

No.	土色	土性	参考	備註
1 黄褐色 10 YR 4/4	粘土質シルト	多量の灰白色火山灰の塊状に含。少量の礫化物を斑状に含。	壁穴	壁穴: 穴
2 こぶし状 10 YR 4/3	シルト	少量の灰白色土・灰を含。少量の礫化物・火山土を斑状に含。火山礫を含。	壁穴: 2号	壁穴: 2号
3 黄 10 YR 4/4	シルト	少量の灰白色土・灰を含。火山礫を含。	壁穴: 3号	壁穴: 3号

第7表 2号住居跡土層註記表

No.	標高	外側	内側	内面	口径	深度 (cm)	備考
1 壁面部分	高さ 1.4m	ヨリヒナゲシ	白い砂利	ベニガラキ、黄色瓦	14.3 - 5.5	深さ 7.7	

第8表 2号住居跡出土遺物観察表



第9図 2号住居跡出土遺物

[柱穴] 3個のピットが確認された。ピット1は柱穴、ピット2は壁穴

柱穴と考えられる。ピット3は柱穴ではない。

[カマド] 検出されなかった。

[貯蔵穴状ピット] 検出されなかった。

[周溝] 壁と同様に全部は検出されなかつたが、壁沿いに存在したものと推定される。幅 22 ~ 35cm、深さ

1 ~ 6 cm、断面は「U」形である。底面レベルは北隅が最も高く、南側に向かうにつれて徐々に低くなる。

[出土遺物] 床面、周溝を中心に、土器の一括資料が出土した。

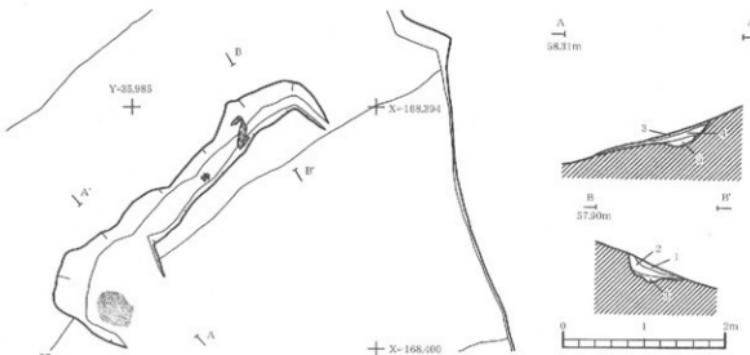
(3) 3号住居跡

[確認面] 基本層面IV層から確認された。

[重複・増改築] 認められない。

[規模・平面形] 北西壁の全部と北東壁・南西壁の一部が検出された。残存する各壁の幅は、北西壁 4.01 m、北東壁 0.73 m、南西壁 1.06 m である。一辺が 4 m 前後の正方形または長方形と推定される。

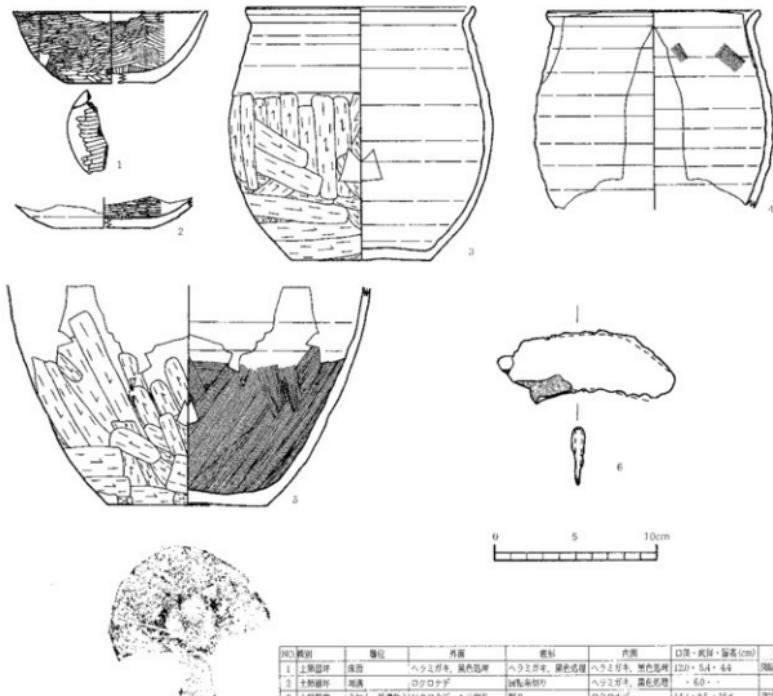
[竪穴層位] 竪穴層位は 3 層に大別され、いずれも自然堆積層である。この中で、層 No.1 は灰白色火山灰を含む。



第10図 3号住居跡

No.	土色	土性	参考	備註
1 灰褐色 10 YR 5/4	泥質シルト	多量の灰白色火山灰を含。少量の礫化物を斑状に含。	壁穴: 1号	壁穴: 1号
2 灰 10 YR 4/4	シルト	少量の礫化物・礁土を含。火山灰を含。	壁穴: 2号	壁穴: 2号
3 こぶし状 10 YR 4/3	シルト	少量の礫化物・礁土を含。火山灰を含。	壁穴: 3号	壁穴: 3号
4 灰 10 YR 4/4	シルト	少量の礫化物を斑状に含。火山灰を含。	壁穴: 4号	壁穴: 4号
5 灰褐色 10 YR 5/4	泥質シルト	少量の火山灰を含。礁土・礁山土を斑状に含。		

第10表 3号住居跡土層註記表



第11図 3号住居跡出土遺物

〔壁〕基本層序IV層からなり、最も保存の良い北西壁では33cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序IV層を床面とする。西隅に強い火熱の痕跡が認められた。比較的急な斜面に立地しており、標高57m以上の僅かな部分のみ残存している。

〔柱穴〕検出されなかった。

〔カマド〕検出されなかった。土器の一括資料が出土したことや位置的に西隅の強い火熱の痕跡がカマドとも考えられるが、確証はない。

〔貯蔵穴状ピット〕検出されなかった。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに存在したものと推定される。幅12~37cm、深さ4~8cm、断面は「U」形である。底面レベルは北西壁の北隅付近が最も高く、南東側に向かうにつれて徐々に低くなる。

〔出土遺物〕周溝、強い火熱の痕跡付近を中心に、土器の一括資料が出土した。

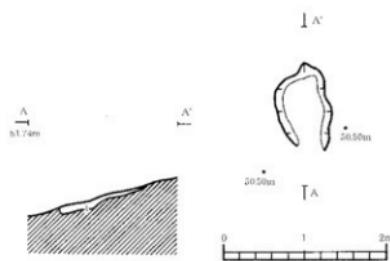
第11表 3号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	外観	底質	内面	口径・底径・高さ(cm)	参考
1	土器遺跡	床面	ヘラミガキ、黃色泥質	ヘラミガキ、黑色泥質	ヘラミガキ、黑色泥質	22.0×54.4×4.4	実測 1
2	土器遺跡	周溝	ロクロナデ	砂利	ヘラミガキ、黑色泥質	6.0×-	-
3	土器遺跡	2号(周溝)	ココナデ、ヘシ陶片	削り	ロクロナデ	24.1×8.8×5.6	実測 2
4	土器遺跡	2号(底面)	ロクロナデ	-	ロクロナデ、ナデ	13.0×-	実測 10-2
5	土器遺跡	1号(底面)	ロクロナデ、ヘラ削り	削り	ロクロナデ、ナデ	10.0×9.8×-	実測 10-1
6	金属器具	1号	底存長:11.0cm 幅:3.0cm 厚:0.5cm	-	-	-	-

2. 土壌

(1) 1号土壌

調査区南東部斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸 1.04 m, 短軸 0.68 m, 深さ 0.24 m の規模で、平面形は不整方形を呈する。底面はやや凹凸があり、壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で、自然堆積層である。



第12図 1号土壌

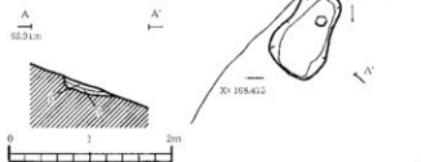
土色	土性	標号	大別
赤褐色	粘土質	少量の赤褐色を含む	自然堆積層
褐色	シルト	少量の赤褐色を含む	

に記入箇所 10 YR 4/2 シルト 少量の赤褐色を含む 粘土を含む一塊状、堆積土を複数に含む、細かい、自然堆積層

第12表 1号土壌土層記表

(2) 2号土壌

調査区南西部斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸 1.11 m, 短軸 0.57 m, 深さ 0.32 m の規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。壁面の一部に崩落の痕跡が確認された。堆積土は 2 層に細分され、いずれも自然堆積層である。この中で、層 No.1 は灰白色火山灰を含んでいる。遺物は、土師器の破片が出土した。



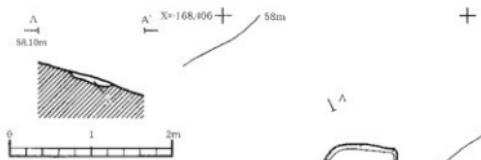
第13図 2号土壌

No.	土色	土性	標号	大別
1	赤褐色	粘土質シルト	多量の灰白色火山灰を含む塊状、少量の赤褐色を含む	自然堆積層
2	褐色	シルト	少量の灰白色火山灰を含む	

第13表 2号土壌土層記表

(3) 3号土壌

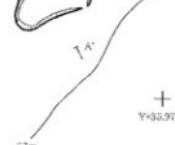
調査区南西部斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸 0.96 m, 短軸 0.47 m, 深さ 0.18 m の規模で、平面形は不整方形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で、自然堆積層である。遺物は、土師器の破片が出土した。



第14図 3号土壌

(4) 4号土壌

調査区南西部斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸 0.93 m, 短軸 0.57 m, 深さ 0.17 m の規模で、平面形は梢円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で、自然堆積層である。遺物は、土師器の破片が出土した。



No.	土色	土性	腐朽	大別
1	灰褐色10 YR 5/4	シルト	少量の腐化物を含む、地盤に含む、表面を含む。	自然堆積層

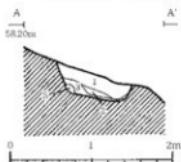
第 15 表 4号土壤土層註記表

(5) 5号上壤

調査区南西部斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸2.75 m, 短軸0.84 m, 深さ0.50 mの規模で、平面形は不整方形を呈する。底面は南西側が高く北東側に向かうにつれて徐々に低くなるが、全体としてはほぼ平坦である。壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積層である。

No.	土色	土性	腐朽	大別
1	灰褐色10 YR 4/2 シルト	少量の腐化物を含む、地盤に含む。	地盤に含む。	自然堆積層
2	灰褐色10 YR 5/4 シルト	少量の腐化物を含む、地盤上を含む。	地盤上を含む。	自然堆積層
3	灰褐色10 YR 5/6 シルト	少量の腐化物を含む。	地盤に含む。	自然堆積層

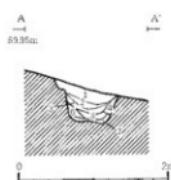
第 16 表 5号土壤土層註記表



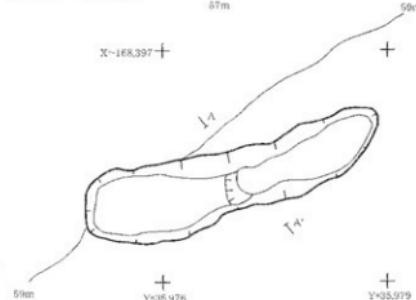
(6) 6号上壤

調査区南西部斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸4.12 m, 短軸1.04 m, 深さ0.71 mの規模で、平面形は不整方形を呈する。底面は二段に分かれ、西側が高く東側が低い。いすゞ

れもほぼ平坦である。壁は急に立ち上がる。堆積土は7層に細分され、層No.1・2・5は自然堆積層、層No.3・7は人為的埋土、層No.4・6は壁崩落土である。



第 16 図 5号土壌



第 17 図 6号土壌

No.	土色	土性	腐朽	大別
1	灰褐色10 YR 4/4	シルト	少量の腐化物を含む、地盤に含む、表面を含む。	自然堆積層
2	灰褐色10 YR 4/2	シルト	少量の腐化物を含む、地盤に含む。	自然堆積層
3	黄褐色10 YR 5/6	シルト	多量の腐化物を含む、地盤に含む。	人為的埋土
4	黄褐色10 YR 5/6	シルト	少量の腐化物を含む、地盤に含む。	人為的埋土
5	灰褐色10 YR 4/2	シルト	少量の腐化物を含む、地盤に含む。	自然堆積層
6	暗褐色7.5 Y 6/6	泥炭	少量の腐化物を含む。	自然堆積層
7	黄褐色10 YR 5/6	シルト	少量の腐化物を含む。	人為的埋土

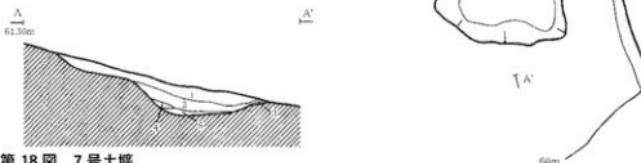
第 17 表 6号土壤土層註記表

(7) 7号土壌

調査区南西部斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸 2.93 m、短軸 1.31 m、深さ 0.70 m の規模で、平面形は不整方形を呈する。底面は凹凸があり、長軸方向が階段状になっている。壁は急に立ち上がる。堆積土は 5 層に細分され、層 No.1 ~ 3・5 は自然堆積層、層 No.4 は壁崩落土である。

No.	土色	土性	層名	大別
1	褐色 10 YR 3/3	シルト	少量の礫山土を含む。	
2	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の礫山土を含む。	自然堆積層
3	こいの葉褐色 10 YR 5/4	シルト	少量の礫山土を含む。	
4	褐 10 YR 4/6	場上質シルト	少量の礫山土を含む。	
5	褐色 10 YR 3/3	場上質シルト	少量の礫山土を含む。	自然堆積層

第 18 表 7号土壌土層註記表



第 18 図 7号土壌

(8) 8号土壌

調査区南西部斜面の基本層序III層から確認された。重複は認められない。長軸 1.24 m、短軸 0.77 m、深さ 0.29 m の規模で、平面形は不整方形を呈する。底面は凹凸があり、壁は急に立ち上がる。堆積土は 5 層に細分され、層 No.1 ~ 4 は自然堆積層、層 No.5 は壁崩落土である。

(9) 9号土壌

調査区南西部斜面の基本層序III層から確認された。重複は認められない。長軸 0.91 m、短軸 0.65 m、深さ 0.38 m の規模で、平面形は不整方形を呈する。底面は凹凸があり、壁は急に立ち上がる。堆積土は 4 層に細分され、いずれも自然堆積層である。

No.	土色	土性	層名	大別
1	褐色 10 YR 2/3	シルト質シルト	少量の変化物・鉄山土を含む。	
2	褐色 10 YR 3/3	シルト	少量の変化物を含む。	
3	褐色 10 YR 5/6	シルト	少量の鉄山土・赤玉砂・シルト・粘土物を含む。	自然堆積層
4	こいの葉褐色 10 YR 5/4	シルト	少量の変化物を含む。	
5	褐色 10 YR 5/6	シルト	少量の鉄山土・YR 3/3 シルトを含む。	

第 19 表 8号土壌土層註記表

No.	土色	土性	層名	大別
1	褐色 10 YR 3/4	シルト	少量の鉄山土を含む。	
2	こいの葉褐色 10 YR 5/4	場上質シルト	少量の鉄山土を含む。	
3	こいの葉褐色 10 YR 5/4	シルト質シルト	少量の鉄山土を含む。	自然堆積層
4	褐色 10 YR 4/6	粘土質シルト	少量の鉄山土を含む。	

第 20 表 9号土壌土層註記表

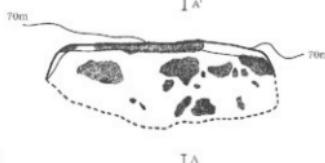
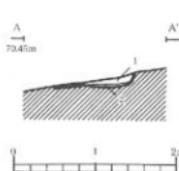


第 19 図 8・9号土壌

3. 焼土遺構

(1) 1号焼土遺構

調査区東北部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸 2.80 m、短軸 1.00 m、深さ 0.21 m の規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は 2 層に細分され、層 No.1 は自然堆積層、層 No.2 は炭化物層である。底面と壁の一部が強い火熱を受け、赤変していた。



第 20 図 1号焼土遺構

No.	土色	土性	層名	大きさ
1	赤褐色 10 YR 2/7	シルト	少量の炭化物・黒土を含む、堆積土。	自然堆積層
2	褐 6 YR 1/7	—	少量の炭化物を含む、底面に当たる。	炭化物層

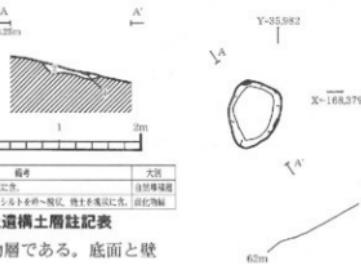
第 21 表 1号焼土遺構土層記表

(2) 2号焼土遺構

調査区南西部緩斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸 0.81 m、短軸 0.62 m、深さ 0.13 m の規模で、平面形は不整方形である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は 2 層に細分され、層 No.1 は自然堆積層、層 No.2 は炭化物層である。底面と壁の一部が強い火熱を受け、赤変していた。

No.	土色	土性	層名	大きさ
1	褐色 10 YR 3/3	シルト	少量の炭化物を含む、塊状に含む。	自然堆積層
2	褐 10 YR 2/1	—	少量の炭化物 10 YR 3/3 シルトを含む、底面に当たる。	炭化物層

第 22 表 2号焼土遺構土層記表

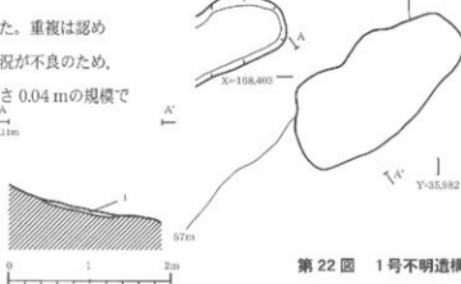


第 21 図 2号焼土遺構

4. 不明遺構

(1) 1号不明遺構

調査区南西部斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。当初は住居跡と考えていたが、遺存状況が不良のため、不明遺構とした。長軸 2.45 m、短軸 1.20 m、深さ 0.04 m の規模で残存し、平面形は正方形または長方形と推定される。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は單層で、人為的埋土である。底面を平坦にするための盛土と考えられる。



第 22 図 1号不明遺構

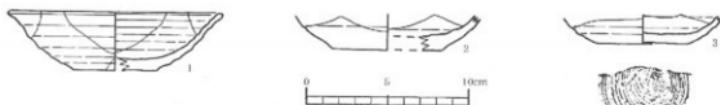
No.	土色	土性	層名	大きさ
1	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物・地土を含む、堆積土を含む。	人為的埋土

第 23 表 1号不明遺構土層記表

5. その他

以上の遺構と遺物の外に、平成 10 年度の確認調査で窓跡が 1 基発見された。これに伴い少量の遺物が採

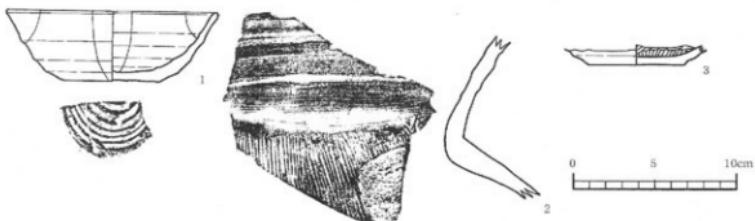
集された。また、調査区外からも窯跡が2基発見された。いずれも少量の須恵器を伴っていた。他に、調査区から土師器、須恵器、縄文土器が表面採集された。



第23図 1号窯跡出土遺物

No.	種別	経度	外観	底面	内面	U径・底径・高さ(cm)	参考
1	須恵器	表底	ロクロナギ	鉢底丸切り	ロクロナギ	13.2・5.1・3.6	周辺 15-1
2	須恵器	表底	ロクロナギ	鉢底丸切り	ロクロナギ	—・—・—	
3	須恵器	表底	ロクロナギ	鉢底丸切り	ロクロナギ	—・5.5・—	

第24表 1号窯跡出土遺物観察表



第24図 表探遺物

No.	種別	経度	外観	底面	内面	U径・底径・高さ(cm)	参考
1	須恵器	表底	ロクロナギ	鉢底丸切り	ロクロナギ	12.8・6.6・4.3	周辺 16-2
2	須恵器	表底	ロクロナギ	タタキ	ロクロナギ	—・—・—	周辺 16-3
3	土師器	表底	ロクロナギ	鉢底丸切り	ハラミガキ	正角形孔	—・5.9・—

第25表 表探遺物観察表

V. 考察とまとめ

今回の調査では古代の遺物が出土した。量的に少ないとみたため、検出された遺構の検討と併せて記していく。

(1) 住居跡

住居跡は3軒検出された。1号住居跡は斜面の中程に位置する。本遺構にはロクロビットが設置されていた。ロクロビットは、土器製作時にロクロを設置するための穴で、粘土をのせる円盤とこれを支える軸木からなるものと推定される。上面径53cm、小穴径19cm、深さ68cm(小穴上部まで30cm)の規模で、平面形は円形を呈する。このようなロクロビットを伴う検出例は、第26表のとおりである。本遺跡では初の検出例となる。近接する闇ノ入遺跡でもロクロビットは検出されているが、いずれも1個だけの検出となる。

ロクロビットの検出パターンとしては、①数箇所から検出された、②1軒の中から複数検出された、③①と②の複合型、④1個だけ検出された、の4通りが考えられる。この中で、①～③に該当する遺跡には青森県鶴川(4)・(12)遺跡、岩手県南部工業団地内遺跡・相去遺跡・高前田遺跡・藤沢遺跡・藤沢(V)遺跡・煤系遺跡・瀬谷子遺跡、秋田県駒ヶ沢窯跡・郷土館窯跡、山形県平野山古窯跡群、宮城県日の出山窯跡群、福島県広網遺跡・大戸古窯跡群・大久保F遺跡などがある。この中で、青森県を除く東北5県の遺跡は、大規模な城柵官衙などへの土器の供給、あるいは一時的に相当数の土器生産が行われたものと考えられる。

県市町村名	遺跡名	調査年度	遺跡名	性 素	備 考
青森県青森市	野木遺跡	平成10	水須遺跡	平安時代	「瀬口クロ」と考えられるロクロ断面。
*	*	*	* 第319号住居跡	9C中～9C後	「ロクロビット」。
*	*	*	* 第324号住居跡	9C中	
*	*	*	* 第347号住居跡	10C初	
*	*	*	* 第478号住居跡	9C後～9C後	「ロクロビット」。
*	*	*	* 第486号住居跡	*	「ロクロビット」。ビット上部にテラス。
*	*	*	* 第702号住居跡	10C前	
* 五所川原市	鶴田(2)遺跡	平成11	第7号住居跡	9C末～10C初	裏側に多量の船石堆。
*	*	*	第1号住居跡	9C中～10C前	2基あり。切妻造瓦葺土塹。
*	*	*	* 第3号住居跡	*	13個。4層の木造木製定形の住居土・瓦房が複数棟。
*	*	*	* 第4号住居跡	*	2基あり。白色粘土塊。
*	*	*	* 第6号住居跡	*	2基あり。(多量の自然礫が覆土に固定)。
*	*	*	* 第2号住居跡	*	「粘土塊が多量に出土」。
*	*	*	* 第4号住居跡	*	「人為的な埋葬」。
*	*	*	* 第5号住居跡	*	粘土塊。
岩手県久慈市	舟越遺跡	平成2	P 4-h	10C代	表面に多数の土器片、船石塊、1房跡。
*	船波町	杉ノ上Ⅱ遺跡	昭和48	P II 56(第2次)	9C代 工人の生活遺跡、白色粘土塊。
*	北上市	福去遺跡	*	第6地区4号址	10C後～11C前 2基あり。住居跡は4個の建合。
*	*	*	*	第8地区2号址	*
*	*	*	高前I遺跡	昭和49	(5棟あり) 9C後～10C前 1棟の中に2～3基のロクロビットを持つものもある。
*	*	*	西野遺跡	昭和50	C I 50 10C後～11C前 第2期の住居跡に伴うもの。
*	*	*	藤原康源	昭和63	S I 006 9C代 2基あり。「中心孔を持つ土坑」。周囲に生粘土の敷布。
*	*	*	南部工業団地内遺跡	*	土師器工場跡。
*	*	*	柳沢(Ⅲ)遺跡	平成元	S I 021 10C前後 「ロクロの施設として理解されている」。赤焼土壁付。
*	*	*	深谷遺跡	平成2	IVB 6号 9C後? 3基あり。船石塊。
*	*	*	柳沢(Ⅴ)遺跡	平成10	S I 041 一 ?基あり。「埋合渠4段のビット」。
弘前市	鶴谷II遺跡	昭和45	第2号I周跡	9C～10C 「陶土と見られる…白粘土」。	
*	*	*	*	第3号I周跡	*
*	*	*	*	第4号I周跡	*
*	*	*	*	高S号I周跡	*
*	*	*	*	*	「灰白色土」。塊。
* 水沢市	林前南遺跡	平成13	S I 0191	平安時代 白色粘土塊。	
秋田県能代市	十二林遺跡	昭和63	S I 95 10C 「ロクロを受けて」のビット。土器製作の工場的性格。		
*	*	*	*	S I 108	*
*	*	*	*	S K P 16 早平安時代 「壇物とともに多量の船土塊」。	
*	*	*	*	S K P 17	*
*	*	*	*	S K P 17	「十脚脚の瓦底壁竹」。
*	*	*	岡久草下遺跡	平成3	S I 319 9C代 「ロクロを擬え付けるためのビット」。
*	*	*	室ヶ沢II遺跡	平成4	S I 01 9C代
*	*	*	野上船跡	平成10	S I 36 早平安時代 2基あり。
*	*	*	十一生II遺跡	平成11	S K 32 9～10C (米色) 十を取り除くと穂穂の花棒のようビット。
*	*	*	坪ヶ沢船跡	平成12	S K P 01 C 9C後～10C 隅脚十脚付より十脚脚・葉がまとまって出土。
*	*	*	*	S K P 324	*
山形県東田川町	荒山II遺跡	平成7	S T 38	北西壁の中央あり。	
*	*	*	平野山II遺跡第12地点	平成9	S P 57 9C I 四半期 「ロクロビットと思われる岩石のビットと船土塊」。
*	*	*	*	S P 65	*
*	*	*	*	S P 84	*
宮城県仙台市	月の出山発掘跡C地点	平成3～4	第2丹型I住居跡	備考・神龜年間	2基あり。中央に径2cmの棒状の痕跡。白色粘土塊。
*	*	*	* 第3丹型I住居跡	英平11年前後	中央に径5cmの棒状の痕跡。
*	*	*	* 第4a丹型I住居跡	義名・神龜年間	2基あり。中央に径10cmの棒状の痕跡。
*	*	*	* 第4b丹型I住居跡	英平11～12年後	2基あり。重複。中央に約6cmの棒状の痕跡。
*	*	*	* 第7丹型I住居跡	英平11以前	白色粘土塊。中央に径10cmの棒状の痕跡。
*	*	*	* 第9丹型I住居跡	英平11～前後	*
*	河原町	門ノ入遺跡	平成4	42号化粧跡	8C 4四半期 白色粘土塊。
*	*	*	平成13	1号住居跡	9C後～10C初 白色粘土塊。台石。多量の磯。上部器質。
仙島族都山市	広瀬遺跡	昭和59	5号住居跡	9C前～9C中 3基あり。いずれも中央に棒状の黒石上。	
*	*	*	*	9号住居跡	粘土塊。中央に径12cmの棒状の黒石上。

福島県郡市名	立派遺跡	昭和 59	24 号住居跡	9 C 前～9 C 中	北西コーナーに粘土質（1.9 m × 1.1 m）。
* *	*	*	28 号住居跡	*	ピット内に堅い約 4 cm の陶器物（ロクロ台と思われる）。
* 会津若松市	大戸吉窯跡群（上両屋 7 号窯）	平成 2	1 号住居跡工房跡	9 C 代～10 C 代	6 通あり、中輪や柱跡。周辺に白色の粘土塊。
* いわき市	大久保 F 遺跡	平成 7	1 号住居跡	9 C 4 四半期	「1・2 はロクロの軸受けの可能性が高く…」。
* *	*	*	3 号住居跡	*	白色粘土塊。
* *	*	*	4 号住居跡	*	白色粘土塊。
* *	*	*	7 号住居跡	*	2 通あり、白色粘土塊。
* *	*	*	8 号住居跡	10 C 1 四半期	白色粘土塊。
* *	*	*	9 号住居跡	9 C 4 四半期	白色粘土塊。
* *	*	*	10 号住居跡	*	白色粘土塊。

第 26 表 東北地方のロクロビット

これに対して、④に該当する遺跡には、①～③の遺跡と同じ性格であるが偶然にも資料数が乏しいために④に含まれるもの、①～③の遺跡における土器生産の補完的な役割を担う性格の遺跡、その都域内の小規模流通などが考えられる。

須江窯跡群の一例である細田遺跡は、牡鹿郡家または牡鹿柵と推定される矢本町赤井遺跡をはじめとする牡鹿郡内へ須恵器を供給した遺跡と考えられる。これまでに須江瓦山窯跡から赤井遺跡に供給された瓦、あるいは須江窯跡群から赤井遺跡に供給されたとされる須恵器の量は、決して多くない。また、須江窯跡群の操業期間が 8 世紀後半から 10 世紀前半であるのに対し、官衙と推定される赤井遺跡「期は 8 世紀初頭から 9 世紀前半であることから、重複期間が短く、城柵官衙などへの一時的な土器の大量供給の機会は少なかったものと考えられる。そこで、須江窯跡群は補完的な役割を担う遺跡の性格と都域内の小規模流通の性格を有するものと推定される。

このロクロビットの堆積土中には数個の石があり、ロクロ回転台の軸受けを安定させるために用いられた可能性が考えられる。また、ロクロビットの周囲には 40 × 25 × 15 cm の精製された白色粘土塊をはじめとする粘土塊や作業用の台石として使用されたと推定される加工石が出土した。後述する土師器壺を含め、土器製作時にロクロビットを巡る一組の資料として考えられる。

遺物は、土師器壺・甕、須恵器壺が出土した。土師器壺は外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理、底部：回転糸切りの表杉ノ入式のものが 2 点あり、1 点は体部下半にやや内湾があり、もう 1 点は外湾しながらそのまま口縁部へ向かうタイプのものである。口径：底径比は、1 : 0.40 である。いずれも 9 世紀代のものである。土師器甕は 2 点ある。1 点は長胴形で、外面：ロクロナデ・ヘラ削り、内面：ロクロナデ・ナデの調整で、体部中央やや上が最も膨らむものである。もう 1 点が胴張形で、外面：ロクロナデ・ヘラ削り、内面ロクロナデ・ナデ、底部：削りの調整である。いずれも 9 世紀代のものと考えられる。この 2 点は、本遺構が使用されなくなった際にロクロビット内に廃棄されたものと推定される。須恵器壺は 2 点ある。いずれも底部から口縁部にかけて楕円形にやや膨らみながら至るもので、口径：底径比は 1 : 0.36 である。SEK 1 窯段階のものと推定される。

また、1 号住居跡の堆積土からは 915 年に降下したとされる十和田 a 火山灰と推定される火山灰が多量に検出されており、これらを踏まえると、本遺構は 9 世紀第 4 四半期から 10 世紀初頭の年代が与えられる工房跡と推定される。

2 号住居跡は、1 号住居跡の南西側に隣接する。1 号住居跡と同様に、堆積土からは多量の十和田 a 火山

灰と推定される火山灰が検出された。遺物は、土師器壺が出土した。外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理、底部：回転糸切りの表杉ノ入式のもので、底部から口縁部にかけて楕形にやや膨らみながら至り、口径：底径比は1：0.42である。

当初、1号住居跡と2号住居跡の関係は、会津大戸窯上雨屋7号窯跡地区の工房跡と住居跡に見られる関係を想定した。しかし、本遺構の出土遺物が1号住居跡のそれよりもやや古いと考えられるため、本遺構は9世紀第3四半期頃の住居跡または工房跡と推定される。

3号住居跡は、1号・2号住居跡よりもやや高い位置にある。前記住居跡と同様に、堆積土からは十和田a火山灰と推定される火山灰が検出された。南西側に強い焼け面があり、カマドあるいは火跡と推定される。

遺物は、土師器壺・甕・鎌と見られる金属製品が出土した。土師器壺は2点出土した。1点は外面・内面・底部の全てがヘラミガキ・黒色処理で、底部から口縁部にかけて楕形にやや膨らみながら至り、口径：底径比は1：0.45である。もう1点は、外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理、底部：回転糸切りである。土師器甕は3点出土した。2点は小型、1点は胴張形のものである。小型甕は外面：ロクロナデ・ヘラ削り、内面：ロクロナデ、底部：削りのものと、外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ・ナデのものである。2点とも体部中央付近が最も膨らむ型のものである。胴張形の甕は外面：ロクロナデ・ヘラ削り、内面：ロクロナデ・ナデ、底部：削りのものである。体部下半のみの破片であるが、底部から口縁部に向かう外形線から推定して、最も胴の張る部分は体部中央よりもやや上にくるものと思われる。以上の組み合わせからなる土器は閑ノ入遺跡1号住居跡に近いことから、本遺構は9世紀中葉から後半頃の住居跡または工房跡と推定される。

以上3軒の住居跡のうち、1号は工房跡、2号・3号は住居跡または工房跡の性格をもつが、全て工房跡とすれば、時期を変えて工房が同一斜面上に存在したこととなり、須江窯跡群が補完的な役割を担う遺跡であったことの補足資料になりうる。

(2) 土壙

土壙は9基検出された。この中で、2号土壙は堆積土中に十和田a火山灰と推定される火山灰を含んでいる。1号・2号住居跡の並びにあり、遺物は土師器壺・甕の破片が出土した。壺は外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理で、表杉ノ入式のものと考えられる。甕は外面：ロクロナデ・ヘラ削り、内面：ロクロナデ・ナデの体部の破片である。9世紀後半代の遺構と推定され、いずれかの住居跡に付属する施設と考えられる。

4号土壙からは、土師器壺の破片が出土した。性格は不明である。

5号土壙は、当初確認調査の段階では1号不明遺構と合わせて住居跡の可能性を考えていたが、事前調査時の精査の際、2基の遺構に分離することがわかった。本遺構は側壁下部と底面付近に広がる粘土を採掘するための穴とも考えられるが、性格・用途について詳細は不明である。時期も不明である。

6号土壙は、堆積土がシルトとシルト質粘土の互層からなる。本遺構は側壁下部と底面付近に広がる粘土を採掘するための穴とも考えられるが、詳細は不明である。また、堆積土の状況から見て精製過程の粘土を熟成させるための粘土溜の可能性も考慮した方がよい、とのご教示を遠藤寿哉氏から得た。時期は不

明である。

7号土壙は、側壁及び底面に広がる粘土を追うようにして掘ってあることから、粘土採掘坑跡の可能性が考えられる。時期は不明である。

この他の1号・3号・8号・9号土壙については、性格・用途及び時期について一切不明である。

(3) 焼土遺構

焼土遺構は2基検出された。1号焼土遺構は比較的規模の大きなものになる。2号焼土遺構は小規模なものである。いずれも性格・用途及び時期は不明である。

(4) 不明遺構

不明遺構は1基検出された。本遺構は、当初5号土壙と合わせて住居跡の可能性を考えていたが、事前調査の際、2基に分離することがわかった。本遺構はやや急な斜面に立地しており、その堆積土は人為的埋土で、固くしまっていた。そこで、この人為的埋土は平らな面を造り出すために置かれた整地層と考えられる。この整地層によって形成された整地面は、5号土壙につづく一連の作業面の可能性がある。遺物は、土師器壺・甕が出土した。壺は外側：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理で、表衫ノ入式のものと考えられる。甕は長胴形のもので、外側：ロクロナデ・ヘラ削り、内面：ロクロナデ・ナデの口縁部と体部の破片である。1号・2号住居跡より古い9世紀代の土器作りに関連した遺構と推定される。

(5) その他

平成10・11年度の確認調査によって、平成13年度調査区の北側に須恵器窯を1基確認した。遺物は須恵器壺・甕が出土した。壺は、外側・内面：ロクロナデ、底部：回転糸切りで、口径：底径比は1:0.39である。甕は、外側：ロクロナデ・ヘラ削り、内面：ロクロナデ・ナデの体部の破片である。9世紀後半代の遺構と推定される。他に、南西側の隣接地に9世紀代の須恵器壺・甕の破片や窯体が散布していること、やや窪んだ場所があること、南西約200m先の道路法面に9世紀代の須恵器窯があることから、数基の須恵器窯の存在が想定される。

まとめ

今回の発掘調査で、以下のことが分かった。

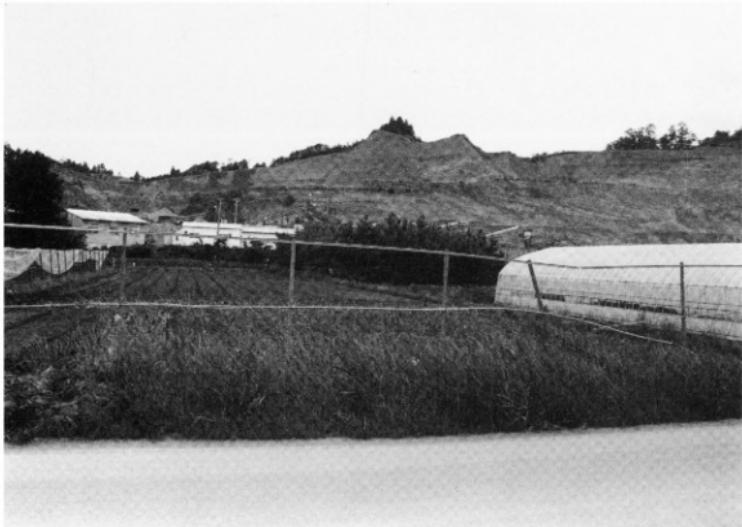
- (1)細田遺跡は、平安時代の生産遺跡と縄文時代の散布地で、複合遺跡であること。
- (2)ロクロピットを持つ工房跡(1号住居跡)、粘土採掘坑跡と考えられる土壙が検出されたほか、窯跡も確認され、須恵器生産に関わる遺構が揃った。特に工房跡のロクロピットは、精製された白色粘土塊・作業用の台石として使用されたと推定される加工石・土師器甕が一組となって出土しており、工房内の状況の分かる好資料が得られたこと。
- (3)細田遺跡は須江窯跡群の一部であり、9世紀後半から10世紀初頭にかけて須恵器の生産を行っていたと推定されること。

引用・参考文献（五十音順）

- 石井武政・柳沢幸夫ほか(1982.2):「松島地域の地質」「地域地質研究報告書」秋田(6)第89号 通商産業省工業技術院地質調査所
- 石田明夫(1993.3):『会津大戸簾一大戸古窯跡発掘調査報告書—遣構編』会津若松市教育委員会
- 石本弘・菅原洋夫ほか(1996.12):「常磐自動車道遺跡調査報告書8(大久保F遺跡)」『福島県文化財調査報告書』第330集 福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター・日本道路公団
- 伊東信雄(1957.3):「古代史」「宮城県史」第1巻 宮城県
- 稲野裕介(1988.3):「藤沢遺跡」『北上市文化財調査報告書』第54集 北上市教育委員会
- 稲野裕介(1990.3):「藤沢遺跡(Ⅱ)」『北上市文化財調査報告書』第58集 北上市教育委員会
- 岩手県教育委員会(1979.3):「東北新幹線開通埋蔵文化財調査報告書—Ⅲ(杉ノトII遺跡)」『岩手県文化財調査報告書』第35集 岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局
- 岩手県教育委員会・北上市教育委員会(1973.11):「古相去遺跡—古代集落跡の発掘—現地説明会資料」岩手県教育委員会・北上市教育委員会 大渡賀一(1999.3):「藤沢遺跡V(遣構編)」『北上市埋蔵文化財調査報告書』第37集 北上市教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄(1990.6):『新版標準土色帖』10版 日本文研事業株式会社
- 加藤竜(2001.3):「古関II遺跡—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る発掘調査報告書—」『秋田県文化財調査報告書』第317集 秋田県教育委員会
- 河南町(1971.3):「風土記開拓書上」「河南町誌」下 河南町
- 伴谷裕子・石田正明(1993.3):「鄭士館宝跡第3次」「横手市埋蔵文化財調査報告書」16 横手市教育委員会
- 木村高・三林健一(1998.3):「隱川(4)遺跡・隱川(12)遺跡I」「青森県埋蔵文化財調査報告書」第244集 青森県教育委員会
- 草間俊一(1971.6):「岩手県江刺市御谷子遺跡 第3次緊急調査報告」江刺市教育委員会・岩手県文化財愛護協会
- 小林芳行・佐々木政任ほか(2000.3):「二・二特B遺跡—県営住場整備事業(金沢地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 『秋田県文化財調査報告書』第304集 秋田県教育委員会
- 桜田隆・高橋学ほか(1992.3):「秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—富ヶ沢A・B・C墓跡 田久保下遺跡 富ヶ沢1号～4号塚—(第2分冊)」『秋田県文化財調査報告書』第220集 秋田県埋蔵文化財振興会
- 佐々木志麻(2002.3):「林前南館跡(19～21次)」「平成13年度水沢市遺跡発掘調査報告会資料」水沢市埋蔵文化財調査センター
- 佐藤庄一・須賀井朋子(1998.2):「平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書」財团法人山形県埋蔵文化財センター
- 佐藤敏幸(1991.3):「御施茶湯跡—発掘調査報告書—」『河南町文化財調査報告書』第5集 河南町教育委員会・建設省東北地方建設局
- 佐藤敏幸(1993.3):「須江案跡前 代官山遺跡」「河南町文化財調査報告書」第6集 河南町教育委員会
- 佐藤敏幸(1993.3):「須江案跡後 間ノ入遺跡—陸奥夷海沿地方最大の須恵器生産地—」『河南町文化財調査報告書』第7集 河南町教育委員会
- 佐藤敏幸(1995.3):「赤井遺跡—牡鹿橋・郡衙擬定地—」『矢本町文化財調査報告書』第3集 矢本町教育委員会
- 佐藤敏幸(1999.3):「赤井遺跡—牡鹿橋・郡衙擬定地—」『矢本町文化財調査報告書』第10集 矢本町教育委員会
- 佐藤敏幸(1999.3):「須江窯跡群の窯業生産開始について—瓦山空堀出土の瓦をめぐって—」『石巻文化センター調査研究報告』第5号 石巻文化センター
- 佐藤敏幸(2001.3):「赤井遺跡1—牡鹿橋・郡衙擬定地—」『県道石巻鹿島台大衛線上区改良工事に伴う調査報告』『矢本町文化財調査報告書』第14集 矢本町教育委員会・宮城県石巻土木事務所
- 佐藤雄一(1986.11):「6板碑」「わがまち河南の文化財」河南町教育委員会
- 佐藤雄一(1997.8):「河南町の板碑」「平成9年度河南町歴史大学」レジュメ 河南町教育委員会
- 志間素前・桑月鮮(1991.11):「宝之峯」 斎藤報恩会
- 清水東四郎(1924.12):「中山櫛跡(住景山)(桃生郡史跡)」「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書」2
- 杉本良・福野彰子ほか(1993.3):「南部工事團地内遺跡I 第1分冊 本文・実測図版」『北上市埋蔵文化財調査報告書』第9集 北上市教育委員会
- 鉢木省三(1924.12):「中山櫛」「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書」1
- 鉢木良仁・須賀井明子(1996.9):「富山2遺跡発掘調査報告書」財团法人山形県埋蔵文化財センター
- 高橋学・小林克(1989.3):「一般国道7号八重尾代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II—船田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡—」

- 「秋田県埋蔵文化財調査報告書」第178集 秋田県教育委員会
- 高橋守克・阿部恵(1987.3)：「須江櫛原遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集 河南町教育委員会
- 高松俊雄・柳沼賀治ほか(1985.3)：広瀬城跡発掘調査概報 山都市教育委員会・(既)山都市埋蔵文化財充掘調査事業団
- 龍沢文教・神戸信和ほか(1984.3)：「石谷地城の地質」『地域地質研究報告』秋田(6) 第90号 通商産業省工業技術院地質調査所
- 東海林隆幹・佐々木泰直(1994.3)：「櫛原遺跡発掘調査報告書(第1分冊)」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第196集 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 中嶋友文・相馬良仁ほか(1999.3)：「野木遺跡II」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第264集 青森県教育委員会
- 中嶋友文・相馬良仁ほか(2000.3)：「野木遺跡II」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第281集 青森県教育委員会
- 中嶋友文(2002)：「青森市野木遺跡のまとめ一堅穴住居跡について」『研究紀要』第7号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 中野裕平(1988.3)：「須江閣ノ入遺跡詳細分布調査報告書」『河南町文化財調査報告書』第2集 河南町教育委員会
- 中野裕平・佐藤敏幸(1990.3)：「須江閣ノ入遺跡一工業団地造成に伴う発掘調査概報」『河南町文化財調査報告書』第4集 河南町教育委員会
- 中野裕平(1993.3)：「耕田遺跡」『河南町文化財調査報告書』第8集 河南町教育委員会
- 中野裕平(1994.6)：「折損された板碑」『六軒丁中世史研究』第2号 東北学院大学中世史研究会
- 中野裕平・市川淳一(2000.3)：「闇ノ入遺跡・長者館跡一須江山淨水場配水池建設(壇設)工事に伴う事前調査」『河南町文化財調査報告書』第10集 河南町教育委員会・石谷地方広域水道企業団
- 中野裕平(2000.11)：「御塙蔵跡跡一三陸経貿自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査」『河南町文化財調査報告書』第11集 河南町教育委員会・建設省東北地方建設局
- 濱山宏・佐瀬隆ほか(1992.3)：「轟館跡発掘調査報告書」国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査
- 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第171集 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 藤沼邦彦・小井川和夫ほか(1989.3)：「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25 東北歴史資料館
- 藤原弘明・山口航生(2000.3)：「鶴川(2)外遺跡 発掘調査報告書」県営前田野日農免農整備事業に伴う発掘調査報告書
- 『五所川原市埋蔵文化財調査報告書』第22集 五所川原市教育委員会
- 古川一明・太田肇(1993.3)：「日の出山鶯窓跡一詳細分布調査とC地点西部の発掘調査」『色麻町文化財調査報告書』第1集 色麻町教育委員会
- 船谷英男(1979.3)：「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-II」(西野遺跡)『岩手県文化財調査報告書』第34集 岩手県教育委員会
- 松本彦七郎(1919.5)：「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小屋発掘成績」『人類学雑誌』34の5
- 松本彦七郎(1919.9)：「宝ヶ峯遺跡について」『考古学雑誌』第9卷第9号 日本考古学会
- 水沢市埋蔵文化財調査センター(2001.8)：「林前南館跡 第21次発掘調査現地説明会資料」水沢市埋蔵文化財調査センター
- 宮城県教育委員会(1998.3)：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第176集 宮城県教育委員会
- 三宅宗議・池藤秋輝ほか(1987.3)：「赤井遺跡第1次発掘調査報告」『久本町文化財調査報告書』第1集 久本町教育委員会
- 吉川孝(2001.8)：「鳴ヶ沢窓跡一農林漁業用揮発油税財源等整備事業に係る発掘調査報告書II」『秋田県文化財調査報告書』第327集 秋田県教育委員会
- (1971)：「仙台領内古城番上」『仙台叢書』別巻
- (註) 編著者の記載については、日本国内の図書館における一般的な図書目録の記載方法に従い、同一図書における編著者(または団体)が2人までの場合は氏名(または団体名)全て、3人以上の場合はその図書を代表する2人の氏名のみの記載とし、3人目からは「ほか」の扱いとした。

写 真 図 版



図版 1—1 細田遺跡遠景



図版 1—2 表土除去作業（平成 10 年度）



図版 2—1 表土除去作業（平成 13 年度）



図版 2—2 作業風景（平成 13 年度）



図版 3—1 調査区完掘状況（1）



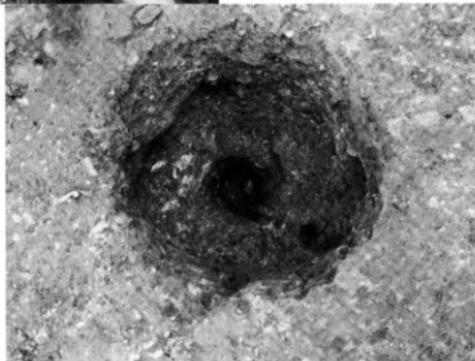
図版 3—2 調査区完掘状況（2）



図版 4—1 1号住居跡完掘状況



図版 4—2 ロクロピット脇
の白色粘土塊と
作業用の台石と
推定される加工
石



図版 4—3 ロクロピット完掘状況



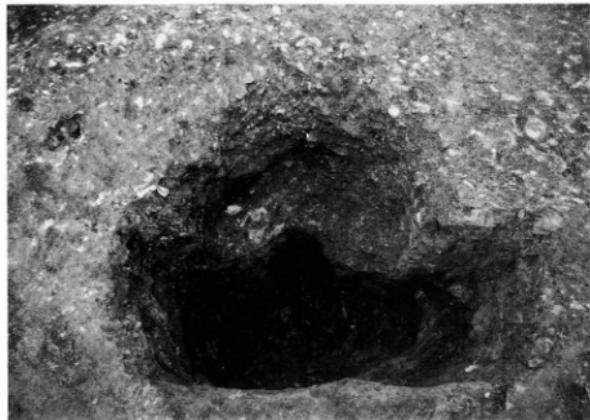
図版5—1 ロクロビット
発掘状況（1）



図版5—2 ロクロビット
発掘状況（2）



図版5—3 ロクロビット
発掘状況（3）



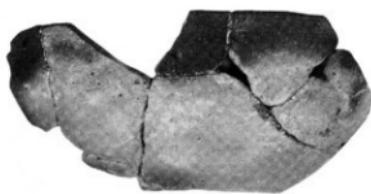
図版6 口クロビット
断ち割り状況



図版7 1号住居跡出土遺物



图版 8—1 2号住居跡完掘状况



图版 8—2 2号住居跡出土遗物



图版 9 3号住居跡完掘状况



图版 10 3号住居跡出土遗物



図版 11—1 1号土壤
完掘状況

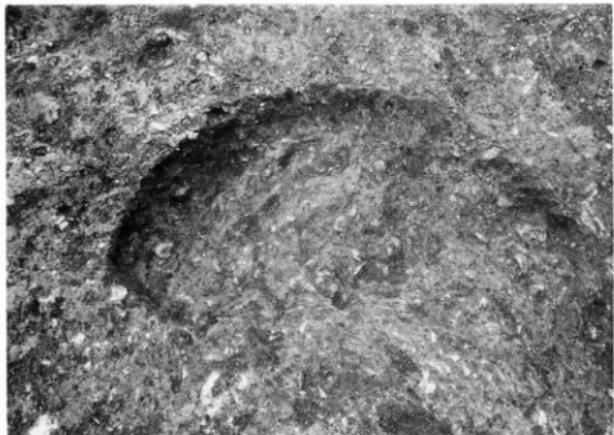


図版 11—2 2号土壤
完掘状況



図版 11—3 3号土壤
完掘状況

图版 12—1 4号土壤
完掘状况

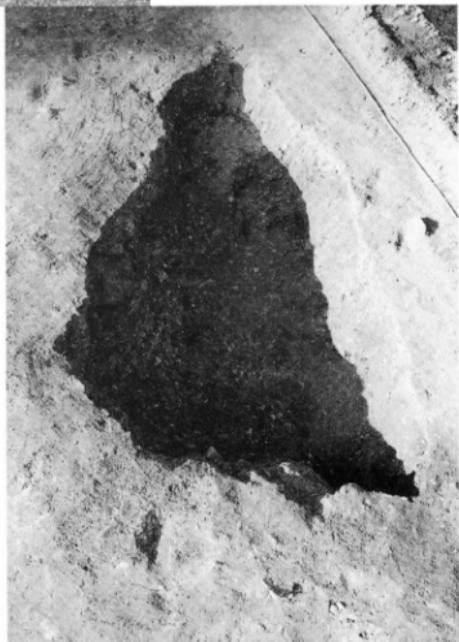


图版 12—2 5号土壤完掘状况





图版 13—1 6号土壤完掘状况



图版 13—2 7号土壤完掘状况



图版 14—1 8号土壤（上）
9号土壤（下）
完掘状况

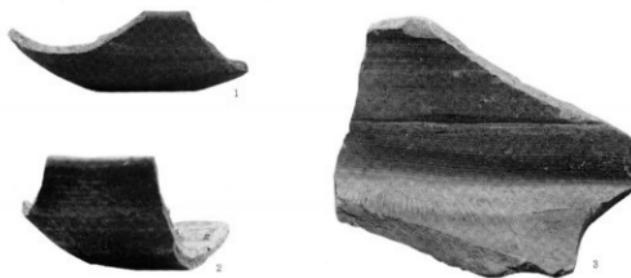


图版 14—2 1号烧土遗构完掘状况



図版 15—1 2号焼土遺構完掘状況

図版 15—2 1号不明遺構完掘状況



図版 16 1号窯跡及び調査区表面探集遺物

報告書抄録

ふりがな	はそだいせき						
書名	細田遺跡						
副書名	細田採石工事に伴う事前調査						
卷次							
シリーズ名	河南町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第12集						
編著者名	中野 裕平・市川 洋一						
編集機関	河南町教育委員会						
所在地	宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7番地						
発行年月日	平成14年12月27日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 遺跡 番号					
はそだいせき 細田遺跡	みやけんものう 宮城県桃生 ぐんかなんちょうす 郡河南町須 えぬぎはそだち 江字細田地 ない内	69052	38° 24' 48"	141° 14' 35"	平成9年8月28日 平成9年9月4日 平成10年11月4日 平成10年11月6日 平成11年10月19日 平成11年10月22日 平成13年10月15日 平成13年12月7日	約5,700m ²	丸興産業 株式会社 による細 田採石工 事により 削平を受 けるため
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
細田遺跡	集落跡 生産遺跡	平安	竪穴住居跡	土師器・須恵器	クロピットと精製 粘土・作業台と推定 される石を伴う竪穴 住居跡あり。		

河南町教育委員会文化財関係出版物

- 『むかしまち河南の文化財』昭和 61 年 11 月 P.1 ~ 201
- 『河南町文化財調査報告書』第 1 集「須江難塚遺跡」昭和 62 年 3 月 P.1 ~ 110(在庫なし)
- 『河南町文化財調査報告書』第 2 集「須江開ノ入道跡詳細分布調査報告書」昭和 63 年 3 月 P.1 ~ 27(在庫なし)
- 『河南町文化財調査報告書』第 3 集「須江開ノ入道跡詳細分布調査 II」平成元年 3 月 P.1 ~ 25(在庫なし)
- 『河南町文化財調査報告書』第 4 集「須江開ノ入道跡一工業団地造成に伴う先歴調査報告書」平成 2 年 3 月 P.1 ~ 67(在庫なし)
- 『河南町文化財調査報告書』第 5 集「御塙藏場跡-発掘調査報告書-」平成 3 年 3 月 P.1 ~ 21(残部僅少)
- 『河南町文化財調査報告書』第 6 集「須江堂跡群 代官山遺跡-奈良、平安時代の須恵器生産遺跡-」平成 5 年 3 月 P.1 ~ 108(残部僅少)
- 『河南町文化財調査報告書』第 7 集「須江堂跡群 附ノ入道跡-陸奥街道地方最大の須恵器生産地-」平成 5 年 3 月 P.1 ~ 230(残部僅少)
- 『河南町文化財調査報告書』第 8 集「群田遺跡」平成 5 年 3 月 P.1 ~ 72
- 『河南町文化財調査報告書』第 9 集「群田遺跡 II」平成 10 年 3 月 P.1 ~ 18(残部僅少)
- 『河南町文化財調査報告書』第 10 集「開ノ入道跡-長者領跡-須江山淨水場配水池建設(増設)に伴う事前調査-」平成 12 年 3 月 P.1 ~ 52(残部僅少)
- 『河南町文化財調査報告書』第 11 集「御塙藏場跡-三條綱貫自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査-」平成 12 年 11 月 P.1 ~ 26(残部僅少)
- 『河南町文化財調査報告書』第 12 集「羅田遺跡」平成 14 年 12 月 P.1 ~ 44

河南町文化財調査報告書 第12集

細田遺跡

—羅田採石工事に伴う事前調査—

平成 14 年 12 月 27 日 印刷

平成 14 年 12 月 27 日 発行

発行 河南町教育委員会

〒987 1101 宮城県栗原市河南町前谷地字奥沢前 7 番地

TEL 0225(72)2111

印刷 株式会社 鈴木印刷所

〒986-0861 宮城県栗原市蛇田町前谷地前 121

TEL 0225(22)4101㈹
